マンゴーの木の下で

～インド・ニューデリー日本人学校での３年間

乙部町立乙部小学校　教諭　　久　慈　学

（派遣期間　２００５．４～２００８．３　）

マンゴーの木の下で２０

はじめに

まだ雪の残る４月の千歳空港から，気温がすでに４０度近く，酷暑を迎えようとしていたインド・ニューデリーへ飛び立った。妻と４人の子どもととに。

海の向こうに何がある？ではないが，とにかく見えない糸でインドという国と結ばれていたのだと今，思う。

３年の任期を全うし今年３月，６人家族がひとりも欠けることなく，無事成田へ足を踏み降ろしたときは，安堵と達成感でいっぱいだった。

インドというこの深くも摩訶不思議な国で暮らすことができたこと，外から我が祖国日本を見つめることができたこと，そして職場をともにした「戦友」，マンゴーの木の下でともに弁当を食べためんこい教え子たちとの出会い。どれもこれもかけがえのない宝物である。

この貴重な機会を与えた下さった方々に心から感謝すると同時に，この貴重な経験を北海道の子どもたちに伝えていきたい。

１．インドについて

外務省・ホームページより

①概要

国名　：　インド共和国　(Republic of India)

人口　：　10億2,873万7,436人(男　5億3,222万3,090人　女　4億9,651万4,346人)
(2001年国勢調査　2004年7月10日発表データより)

人口密度　：　324人　平均寿命：　男　63.9歳/女　66.9歳(2004年経済白書より)

首都　：　デリー(Delhi)

政体　：　連邦共和制　28州、7連邦直轄地

主要都市　：　・ムンバイ　(Mumbai、旧ボンベイ)人口：約1,637万人　・デリー　(Delhi、首都・連邦直轄地)人口：約1,385万人　・コルカタ　(Kolkata、

旧カルカッタ）人口：約 1,322 万人　・チェンナイ(Chennai、旧マドラス）人口：約 642 万人　・バンガロール(Bangalore）人口：約 569 人　・ハイデラバード(Hyderabad）人口：約 553 万人　（2001 年国勢調査より）

時間　：　GMT＋5.5 時間　（日本との時差　3.5 時間）

公用語　：　ヒンディー語（英語＝準公用語、憲法による 21 の公認言語。地方言語は 1650 以上）

※事実上都市部では，英語が通用する。

識字率　：　65.38%　（男　75.85%/女　54.16%）

（7 歳以上で何らかの言語で読み書きができる者の割合）

（2001 年国勢調査による）　**※１０年前の調査より１３%以上の上昇**

宗教別人口比　：

・ヒンドゥー教徒	80.5%	・イスラム教徒	13.4%
・キリスト教徒	2.3%	・シーク教徒	1.9%
・仏教徒	0.8%	・ジャイナ教徒	0.8%
・その他	0.6%		

国旗　：　・サフラン色(上)＝公平無私、自制

・白(中)＝光

・緑(下)＝大地との結びつき

・中央の輪(チャクラ)＝真理、善行

国花　：蓮　　（意外ですね）

国鳥　：くじゃく　　（普通に歩いています）

国の動物　：トラ　　（普通には見られません）

国の果物　：マンゴー　　（普通に生っています）

国の樹　：バニヤン（インドボダイジュ）

同僚はツアーで野生トラを見ました

毎朝行商人との駆け引き・・・右端はガードマン

※　マンゴーは,kgあたりで売られます。3 月末から 8 月くらいまでがシーズン。品種によりねだんは違いますが,大体1kg（4。5個）で40ルピー（100円）くらいでしょうか。（外国人価格）

※　野生のトラを見ることができるツアーがありますが,何しろ野生なので運しだいです。同僚の女性はインド象に乗って見に行くツアーで目の前で見ました。大変興奮していました。うらやましい。

②インドの教育事情

(1)インドの教育システム

インドの教育システムは連邦、州、地区という 3 つの階層で行われており、また長い歴史の中で複雑に発展してきたという経緯もあって、非常に複雑かつ多岐にわたります。しかし、概説すれば 8 年間の初等教育（基本的に小学校 5 年＋中学校 3 年）、4 年間の中等教育（基本的に高等学校 2 年＋上級高等学校 2 年）、3～4 年の高等教育（一般大学 3 年、医科・工科大学 4 年）という制度をとっています。また、日本の教育システムは 6（小学）＋3（中学）＋3（高校）年制なのに対し、インドでは 10（小学・中学・高校）＋2（上級高校）年制をとっているということが違いとして挙げられます。

初等・中等教育のクラス（学年）は州によりさまざまです。しかも同じ州の中でも学校によって級数に違いがあることもあるため、インドの学校制度をひとことで言い表すことはできません。また、インターナショナル・スクールや、イギリス植民地時代のボーディング・スクール（全寮制の学校）も独自の教育システムを持っています。とはいえ、いずれの学校にも共通していえることは、初等・中等教育あわせて 12 年間ということです。

またインドでは 10 年生と 12 年生のときに全国共通試験があり、この試験の成績次第で上級学校への振り分けが行われるため、エリートへの道を目指す学生は必死で勉強をして試験に備えます。つまりインドでは日本のような大学入学試験がなく、代わりに卒業時の全国共通試験で進学が決まるのです。日本以上に学歴社会であるとも言われるインドでは、この試験の成否いかんで人生が決まるといってもおおげさではないくらいで、なかには受験のプレッシャーで自殺者も出るほどです。

(2)インドの識字率

2001 年の国勢調査によれば、インドの識字率は 65.38%。そのうち男性は 75.96%なのに対し、女性は 54.28%と約 22%もの開きがあります。このことから、伝統的に男性優位の考え方を持つインド社会が、女性に対する教育が乏しかったことが見て取れます。とはいえ、1991 年の国勢調査によればインド全体の識字率が 51.63%であったことを思えば、この 10 年間にインドの国力としての教育レベル（識字率）は全体としてかなり底上げされたことは確かです。

しかし，まだまだ学校に行かない（行かせてもらえない）子どもたちはたくさんいます。路上で工事現場で屋台で，今日もたくさんの子どもたちが働いています。

パブリックスクールの子どもたち

路上で手品を見せて稼ぐ子ども

③インドの宗教

2001 年に行われた国勢調査によれば、宗教別にみたインドの人口比は以下のようになります。

・ヒンドゥー教徒 80.5%
・イスラム教徒 13.4%
・キリスト教徒 2.3%
・シーク教徒 1.9%
・仏教徒 0.8%
・ジャイナ教徒 0.8%
・その他 0.6%

（ドライバーのシャルマさんはヒンドゥ）

インドでは、ヒンドゥ教徒が 8 割以上と全人口の大半を占めており、第 2 位で 13.4%を占めるイスラム教徒とあわせると約 95%になり、約 11 億人とも言われる国民の大多数がこの二つの宗教のどちらかを信仰しているということになります。

（家のオーナーはシーク教徒）

（右隣のサニーさんはキリスト教徒）

インド人といえばターバンというイメージですが，常にターバンをまいているのは上の写真のようにシーク教徒です。人口の２%ほどですが，軍隊や警察，そして商人も多く，インドの中では中心的存在でもあります。首相のマンモハン・シン氏もシーク教徒だと思います。

もちろん一番多いのは，８割を占める「牛を崇拝」するヒンドゥ教徒です。最近はカースト制度を嫌ってか「イスラム教」や「キリスト教」に改宗する人も増えているそうです。

④インドのカレー

「インド人はカレーばっかり食べてるの？」とよく聞かれますが，答えはほぼ「イエス」。基本的にほとんどの料理の味付けが日本人の感じるところのカレーなのです。その味付けがマサラと言われる香辛料。普通の家庭でも十数種類以上は使うのではないでしょうか。

ただし，チキン，マトンカレーなどの肉の入ったものばかりではありません。ふだんはポテト・カリフラワー・オクラなど野菜を使ったカレーや，豆を具とするダールカレーなどが中心です。その種類たるや数え切れないほどです。北インドでは小麦を中心とした「ナン」や「チャパティ」（この２つはまったく別物と思って下さい），南インドでは米を中心とした食生活のようです。

個人的には，家のメイドさんが作ってくれる家庭的で素朴な味わいのチキンカレー，近所のレストラ

ンのダールカレー，そして肉屋さんから買ってきて，自分で炒めてヨーグルトを山盛りにのせて食べるマトンカバブが大好物でした。もちろんタンドールチキンも最高！

ちなみに子どもたちのスナック菓子もマサラ（香辛料）テイストのものが大人気です。日本の子どもたちはまったく口にできませんが。

（メイドさんのチャパティは大人気）

（オーナーさんからいただいたマトンカレー　お金持ちは油たっぷり）

⑤インドは安全か？

（1）犯罪・テロリズム

「安全と水がただなのは日本だけ」と言われてきましたが，日本も最近は「安全」がただではなくなりつつあります。

さてインドは？　インドといってもデリーでの経験ですが，命をとられるほど怖い思いをしたことは一度もありませんでした。友人のビジネスマンなどに聞いてみても，「南米やアフリカなどからみたら安心して暮らせる国」ということです。銃がそれほど出回っていないこと，貧富の差はあれどもそれぞれの身分においてまじめに一生懸命生きている人が多いこと（宗教の力？），などが理由でしょうか。

もちろん他の先進国のように犯罪は増えつつありますし，新聞でも連日のように殺人・強盗の凶悪事件は報道されています。しかし，基本的なことに気をつければ「大丈夫」という感じがしました。

テロは３年間でニューデリーだけでも年に数回ほど発生。一番大きかったのは２００５年の１０月です。妻もよく通うマーケットの真ん中で起きました。たまたま同僚が，その場に居合わせてドライバーが危機一髪という状況でした。

以後学校職員間では，「祭日など人が多く出る時に，人が多く集まる場所へはいかない」ということが守られるようになりました。テロは人ごみをねらいます。テロの原因はほとんどが，宗教対立やカシミール問題によるものです。

（2）健康

犯罪よりも？！恐ろしいのがインドではやはり病気です。出国前に家族６人でのべ４０万円近くの予防注射代がかかりましたが，「打っておいてよかった」というのが実感です。

実際に接種してもかかる病気もありますし，現地へ行ってからリブーストしなければならないものもあります。

幸い我が家は恐ろしい伝染病にはかからずにすみました。しかし，予防接種を受けることのできない貧しい子どもたちは実際に病気になって死んでいくことも珍しいことではありません。

蚊を媒介とする「デング熱」は在任中大流行で，蚊を見たら親の敵！とばかりにみんなで叩きました。予防法が「さされないこと」ですから，「叩く」しかないわけです。実際にかかって苦しんだ同僚や日本人学校の児童・保護者の数は少なくありません。緊急輸血の連絡網が回ったこともあります。

また，狂犬病も世界一。夜，街から家へ歩いて帰る時，こわいのは人間ではありません。そこらこちらをうろついている犬が怖いのです。遠くから犬の姿を見つけて遠回りして帰ったことも一度ではありありません。

病気になっても基本的に富裕層は病院にかかることができるので，命を落とすまではいきません。しかし貧しい人は手遅れになってしまうことがあります。

２．ニューデリー日本人学校について

Ⅰ．学校教育目標

〇進んで学習し，よく考える子

〇礼儀正しく，思いやりのある子

〇ねばり強く体力づくりする子

〇世界に目を向ける子

（デリーパブリックスクールと交流）

（現地理解体験・・・テラコッタ作り）

Ⅱ．学校教育方針

（１）人間尊重の精神に徹します。

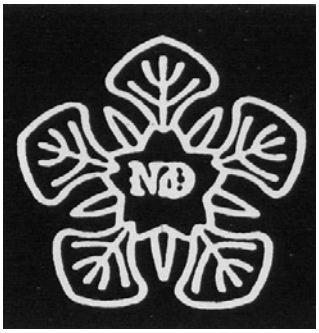
（２）活力ある学校の実現に努めます。

（３）規律ある学校を目指します。

（４）開かれた学校づくりに努めます。

（５）使命感あふれた教師を目指します。

Ⅲ．学校の概要



１．沿革

昭和３９．	９．１	日本人小学校開校式（本校創立）チャナキャプリ校舎
	９．４	中学生補習授業開始
４０．11．	８	スクールバス運行開始
４１．８．30		校歌・校章制定
４４．２．17		フレンズコロニー校舎へ移転
５４．４．１		全日制中学部設置

（校章　桜の花とグルモールの花）　５４．５．29　大使館付属日本人学校と改称

平成元年１．10　ニューデリー日本人学校と改称

２　７．９　新校舎定礎式

３．８．５　バンサントクンジ新校舎（現）へ移転・開校式

５．７．10　学校週５日制実施

６．１．12　国内の小中学校と同等の課程を有する在外教育施設として文部省より制定

７．４．11　幼稚園部開園式

15．11．11　GAKKO BUNKA EDUCATION SOCIETEY のステイタス取得

（現校舎全景）

２．経営主体

・学校の経営主体はデリー日本人会が在します。その運営は同会学校運営部長を理事長とする学校理事会が行います。

・校長は日本人会の青少年児童部長を兼ね，ニューデリー在住の日本人青少年児童の健全育成事業を行います。

～以下略～

Ⅳ．教育活動

１．文部科学省からの派遣教員 14 名，専任教員 1 名，国際交流ディレクター1 名，現地採用講師 4 名，現地スタッフ 20 名の計 40 名により，教育活動を推進しています。（平成 19 年 4 月現在）

２．学年別児童数・生徒数

小　学　部				中　学　部			
年	男	女	計	年	男	女	計
1	１２	8	２０	1	6	4	１０
2	8	8	１６	2	2	1	3
3	１２	8	２０	3	4	0	4
4	8	7	１５	計	１２	5	１７
5	１０	8	１８				
6	9	8	１７	総計	男	女	計
計	５９	４７	106		７１	５２	123

（平成 19 年 7 月 31 日現在）

写真上　２００７．8 月安倍元首相夫人学校訪問

写真左　少年サッカーチームキッカーズ交流試合記念写真

２．特色ある教育活動

⑴ 国際交流

平成 17 年に国際交流ディレクターを迎え，より一層本校の国際交流は活発になった。中心となる交流校は Bluebells School と G.D ゴエンカ校である。前者との交流は 20 年近くにも及ぶ。学校のカリキュラムに日本語コースがあり，日本語とその文化を学ぼうとする姿勢のあふれた学校である。後者は平成１７年から交流を始めた。デリー随一の施設を誇る立派な学校である。

交流内容はお互いの生徒が年に数回訪問し合い，それぞれの学校の授業を受けたり，文化を学んだりする。

年に一度の国際球技大会にも招待し，男子はサッカー女子はバスケットの熱戦を繰り広げる。

上記の現地パブリックスクール以外には，アメリカンスクールとの水泳記録会交流，ジャーマンスクールとのサッカー交流，その他現地校とのダンス交流などがある。

GD ゴエンカ校にて図工をいっしょに

日本語を教える 3 年生

（２）校内水泳大会

デリーの夏は長く，その暑さも筆舌しがたい。逆に言うと水泳授業は，4 月から１０月まで可能である。そこで，全校あげて水泳学習に力を入れ，9 月末にその学習成果の発表の場として校内水泳大会を行っている。

日本では水泳を苦手としていた子どもたちも，大会までにはみな 25 メートルを泳ぎきる泳力をつける。

さらに，年に 2 回ほどアメリカンスクールの水泳記録会にも参加し，交流を深める場となっている。

アメリカンスクール水泳大会　　**恒例のエール交換**

（３）夏祭り・もちつき大会

前者の主催は日本人会，後者は学校であるがともに，異国の地に住む子どもたちに日本文化を存分に味合わせてあげよう，という行事である。

夏祭りでは児童生徒会が中心になって，ゲームなどの出し物，盆踊り（太鼓も児童生徒），中３クラスによる模擬店などを行っている。また，日本人会各団体・企業による，金魚すくい，PK ゲーム，古本市（日本の本はあっという間に売り切れる），たこ焼き，ヨーヨーつりなどに子どもたちの笑顔がはじける。8 月半ばと言え気温はまだまだ３０度後半ではあるが，その暑さも忘れて子どもたちはわずか 3 時間の夏祭りを楽しむ。

もちつき大会は，3 学期開始間もない 1 月のはじめに行われる。担当者は衛生面に細心の注意を払い，冬休み中に準備をする。

当日はグラウンドに日本人学校の生徒のみならず，大人もたくさん訪れてお正月気分を味わう。

ちなみにインド人はおもちは苦手である。(「スティッキー」だと言っている。)

もちつき大会　　**夏祭り　金魚すくい**

（４）課外活動

部活動のない本校。バス通学などにより，放課後の時間があまりないことなどが理由である。しかし，体を動かして遊ぶ場所は家に帰るとあまりない。そこで，水曜日の午後，「アオケレ（ヒンディー語で「いっしょに遊ぼう」の意味）を開設した。

毎回４種目ほどのメニューを用意し，希望者は好きなものを選択して参加する。たとえば，A　サッカー　B　バスケット　C　水泳　D　卓球、、、というようにである。日本全国からタレント豊かな教員がたくさんやってきているので，その得意技を生かしてもらうのだ。

保護者・生徒の要望もあり，現在は金曜日の放課後も「アッチャー・フライデー（楽しい金曜日)」として，水泳やサッカー，バスケットを中心に活動している。

アオケレ　「男佐藤の柔道教室」　　**アオケレ　ビリーザブートキャンプ**

おわりに

念願の在外教育施設派遣であるが，実際にその地に住み，家族をアテンドし，そして仕事をきちんとする，というのはやさしいことではない。

それにはやはり健康が第一である。特に不健康地といわれる地での勤務は，なおさらである。派遣教員に年休はない（制度上はあるので誤解ないように)。定数の８割で仕事を回していくのだから一人休むとみんなに迷惑がかかる。健康管理が日本以上に求められる。

北海道からインドへ渡ったものにとってはやはり暑さが最大の敵であった。なれないエアコン，かといってスイッチを切れば部屋の中は 45 度を越えていく。スイッチを切らなくてもしょっちゅうある停電でエアコンが止まり，何度夜目が覚めたことか。

保護者の学校や教員を見る目も日本？北海道とは比べ物にならなく厳しい。働く母親は０で,すなわち話題は学校や教員のこととなる。しかし，真に仕事を一生懸命やっていれば正当に評価してくれる。それもまた日本以上である。

幸せだったのは，３年間担任を持たせていただいたこと。「ここインドの地でみんなと出会ったことに運命を感じる」と最初の学級通信に書き，それは今でもそう思う。時折やってくる電子メールの子どもたち顔を思い浮かべつつ，しんみりする夜。これもまた佳きかな。

３年間の勤務を支えてくれた家族のみんな，とりわけ妻には感謝の言葉もない。「言葉もない」からといってほんとにきちんと礼をしてないなあ。みなさんはそんなことがありませんように。

末筆ながらこの度，執筆の機会を与えてくださった北海道国際理解教育研究協議会の皆様にこの場をお借りして，お礼申し上げます。

世界遺産タージマハルにて

国際球技大会優勝カップ授与

0

我が家のおふろは大きなポリバケツ・・・